

保健医療学学会

第1回学術集会

プログラム・抄録集



会期:2010年12月4日(土)14:00~18:30

会場:大阪保健医療大学

集会長:大阪保健医療大学 教授 中山広宣

「保健医療学学会第1回学術集会」

プログラム

集 会 長 中山広宣（大阪保健医療大学）

準備委員長 渡辺正仁（大阪保健医療大学）

1) 会期 2010年12月4日（土）14:00～18:30

2) 会場 大阪保健医療大学 1号館4階141講義室

3) プログラム

14:00 開会の辞、集会長挨拶

保健医療学学会第1回学術集会長 大阪保健医療大学 教授 中山広宣

14:10 特別講演

座長 大阪保健医療大学 中山広宣

運動器リハビリテーションの進歩と将来への展望

大阪医科大学 教授 佐浦隆一

15:10 教育講演Ⅰ

座長 大阪保健医療大学 渡辺正仁

医療事故の現状と防止について

医療法人錦秀会 副理事長 藪本恭明

15:40 教育講演Ⅱ

座長 大阪保健医療大学 渡辺正仁

脳卒中リハビリテーションの根拠あるADL予後予測と目標設定

大阪保健医療大学 教授 石倉 隆

16:20 保健医療学学会第1回総会

16:40 一般演題 I

座長 大阪電気通信大学 小柳磨毅

- 1 ACL 再建術後における前方レッグリーチの運動特性 行岡病院 椎木孝幸
- 2 大学スポーツ選手の下肢アライメントと下肢関節可動域の性差について
四條畷学園大学 三谷保弘
- 3 機能的スパッツ着用による動作への影響 四條畷学園大学 向井公一
- 4 関節と GABA システム：正常マウスと関節リウマチモデルマウスによる研究
大阪保健医療大学 渡辺正仁

17:20 一般演題 II

座長 大阪保健医療大学 石倉 隆

- 5 発達障害児を持つ母親への支援についての考察 四條畷学園大学 北山 淳
- 6 左半側空間無視患者における注意喚起による効果 —探索眼球運動検査を用いた検討—
国際医療福祉大学大学院 吉田 健
- 7 脳室周囲白質軟化症小児の視覚情報処理機能と聴覚刺激の影響
久山療育園重症児者医療療育センター 中村泰子
- 8 訪問リハビリテーションにおける療法士の役割意識—アンケート調査を通して—
関西医療技術専門学校 林部博光

18:20 閉会の辞

保健医療学学会第 1 回学術集会準備委員長 大阪保健医療大学 教授 渡辺正仁

懇親会のご案内

学術集会閉会后、学会員や関係職の皆さまの親睦を図る意味で、懇親会を催しますので、下記にご案内いたします。奮ってご参加ください。

懇親会 参加費 3000 円

時 間 19:00~

場 所 大阪保健医療大学 1 号館 3 階 食堂

特別講演

運動器リハビリテーションの進歩と将来への展望

佐浦隆一

大阪医科大学総合医学講座リハビリテーション医学教室 教授

Key words : 運動器リハビリテーション, 運動器の 10 年, 廃用症候群

運動器とは様々な組織, 器官が機能的に統合された筋・骨格、神経系の総称である。運動器は身体の支持, 運動を担うだけではなく, 身体活動によって精神性も表現することができるので人間の存在をも支えている。そして, 加齢に伴う運動器の障害は日常生活動作や生活の質を低下させ、機能予後ばかりでなく生命予後も脅かし、社会にも負担を与える大きな問題となっている。そのため, 世界保健機関は「**BONE AND JOINT DECADE 2000-2010**」を宣言し、本邦でも運動器の 10 年 2000-2010 日本委員会が組織されたが, 日本委員会では運動器障害の病態解明, 運動器障害がもたらす苦痛, 社会的損失の軽減, 運動器の重要性の啓蒙などをテーマに取り組みをすすめて、成果を上げてきている。そして, 運動障害の発症予防による健康寿命の延伸, 難治性疼痛のコントロールなど次の 10 年に向けての運動も始まっている。そこで, 本講演では運動器リハビリテーションの進歩と将来への展望について概説したい。

教育講演 I

医療事故の現状と防止について

藪本恭明

大阪国際総合法律事務所 弁護士 中小企業診断士

医療法人錦秀会 副理事長

Key words : 医療事故, 責任, 防止

医療事故に関する訴訟の件数は必ずしも増加傾向にはない。しかし、現在のように毎年2000人近くの弁護士が増加すると、医療訴訟が増加するおそれ大きい。医療従事者は、医療事故に関する基本的な知識を学ぶとともに、事故防止体制を継続的に向上される必要がある。

1、医療事故の現状

(1) 医療過誤訴訟の件数推移から

医療事故訴訟の特徴とその要因分析

(2) 医療の不確実性と期待ギャップ

2、医療事故に際して、医療者の負う責任

(1) 刑事上の責任

(2) 行政上の責任

(3) 民事上の責任

過失の判断基準として求められる医療水準について

因果関係

期待権論

3、医療事故防止のために

(1) 失敗学

(2) ハインリッヒの法則

(3) コンプライアンス体制の確立～事故防止のシステム化

(4) 医療事故防止の工夫

教育講演Ⅱ

脳卒中リハビリテーションの根拠ある ADL 予後予測と目標設定 —Stroke ADL Prognostic Assessment Set の作成—

石倉 隆

大阪保健医療大学保健医療学部 教授

Key words : 脳卒中, ADL, 予後予測

現在のリハビリテーション医療は、ADL の予後を予測するに当たり、経験則や直感を頼りにして行われていることは否めない。この経験則や直感が長年にわたる 1 例 1 例の慎重な評価と治療、その結果を裏付ける根拠を模索して蓄積させたものであれば、それは信頼に値するものかもしれない。しかし 1 例 1 例の経験には普遍的な科学性はない。また、信頼に耐えうる経験や直感を会得するにはいったい何年の臨床経験が必要なのだろうか。その経験と直感を会得するまでに担当した患者にはどのように対応すればいいのであろうか。初期評価終了時点で、ADL 予後やそれを達成させるための治療プログラムを呈示し、了解を得る「リハビリテーション総合実施計画書」の作成や説明は“経験と直感で作成しました！”で患者は納得するのであろうか。「いつまでにどこまでよくなるのか」が示せない医療がはたしていつまで患者の信頼を獲得し続けることができるのであろうか。患者は、客観性を持った正しい情報を欲している。

経験があろうが無かろうが、リハビリテーション関係職のだれが予測しても同様の ADL 予後が導き出せるような、客観性を持った ADL 予後予測の方法を見出すことが緊急の課題である。そこで、全てのリハビリテーション医療従事者が初期評価段階で簡易に ADL 予後が推測でき、かつ、ADL 項目を個別に予測しうる脳卒中を対象とした“脳卒中 ADL 予後評価セット (Stroke ADL prognostic assessment set ; SAPAS) の作成を試み、ADL 予後予測の客観性や個別性を満足させたいと考えた。

一般 1

ACL 再建術後における前方レッグリーチの運動特性

椎木孝幸（行岡病院） 小柳磨毅（大阪電気通信大学）

小川卓也（行岡病院） 横谷祐一郎（行岡病院）

Key words : ACL, 前方レッグリーチ, 運動特性

【目的】対側下肢を前方にリーチさせる前方レッグリーチ (Front leg reach:FLR) を ACL 再建術後症例に行わせ、その運動特性を明らかにすること。【対象と方法】当院で ACL 再建術を施行した 23 名 (BTB16 名・ST7 名)、測定時期は術後 6 ヶ月時とした。FLR を最大距離かつ最速で 5 回行わせ、矢状面よりデジタルビデオカメラで撮影した。解析には二次元画像解析ソフト ToMoCo-Lite (東総システム社製) を用いて、対側下肢を最もリーチした時の支持脚の膝屈曲角度・下腿前傾角度、体幹後傾角度、リーチ距離、膝角速度を求め健常側と比較した。また Biodex を用い等速運動にて膝筋力を測定した。【結果】健常側に比べ再健側では、膝屈曲角度やリーチ距離などのすべての項目で有意な低下を示した。【考察】後方重心となる FLR では、大腿四頭筋の筋力が重要と考えられるが、筋力が十分に改善していた群についても姿勢に差が見られた。これより股関節屈筋や下腿三頭筋、固有感覚なども影響していると考えられ、後方重心位での姿勢制御のトレーニングをさらに積極的に行う必要性が示唆された。

一般 2

大学スポーツ選手の下肢アライメントと下肢関節可動域の性差について

三谷保弘（四條畷学園大学） 森北育宏（大阪体育大学大学院）

Key words : 荷重連鎖, 下肢アライメント, 性差

【目的】本研究の目的は、大学スポーツ選手の下肢アライメントと下肢関節可動域における男女の特徴を検討することである。【方法】体育系大学の運動部に在籍する 98 名 (男性 59 名, 女性 39 名) を対象に、Q-angle, アーチ高率, 股関節内旋角度, 股関節外旋角度, 足関節背屈角度を測定した。得られた結果を基に、男女における測定値の比較および下肢アライメントと下肢関節可動域の相関関係について検討した。【結果】Q-angle は男性に比べて女性に有意に大きかった ($p<0.05$)。アーチ高率は女性に比べて男性に有意に大きかった ($p<0.01$)。股関節内旋角度は男性に比べて女性に有意に大きかった ($p<0.01$)。女性ではアーチ高率と足関節背屈角度との間に有意な負の相関を認めた ($p<0.01$)。【考察】荷重連鎖では足部の回内に伴い下腿および大腿は内旋運動し膝は外反位となる。今回、女性に認められた下肢アライメントと下肢関節可動域の特徴は、これら荷重連鎖の影響が一つの要因であることが示唆された。

一般 3

機能的スパッツ着用による動作への影響

向井公一（四條畷学園大学） 小柳磨毅（大阪電気通信大学）

Key words : 機能的スパッツ, FRT, 運動力学的分析

【はじめに】今回我々は、通常のスパッツにテーピングの要素を取り入れた機能的スパッツを試作し、その衣類装着による動作への影響を検証した。

【対象】下肢に外傷などの既往がない健常男子大学生 7 名（ 20.6 ± 0.5 歳）である。

【方法】3 種類のスパッツと通常のスパッツを装着した上で、1) 機能的リーチテスト（以下 FRT）、2) 自由歩行を運動課題として行った。計測は、三次元動作解析システムと床反力計を用いて撮影し、下肢関節の運動学および運動力学的解析を行った。

【結果および考察】FRT においては、リーチ距離、足圧中心総軌跡長には、スパッツの種類による違いは見られなかった。自由歩行においては、機能的スパッツ装着時が通常のスパッツ装着時に比べて、踵接地時に股関節伸展トルクおよび膝関節屈曲トルクが減少した。また、踵離地時には、膝関節伸展トルクが有意に増加した。このことから、機能的スパッツは、関節運動の制御に寄与するものと考えられた。

一般 4

関節と GABA システム : 正常マウスと関節リウマチモデルマウスによる研究

渡辺正仁（大阪保健医療大学） 渡辺克哉（近畿大学医学部血液内科）

Key words : 関節, GABA, 関節リウマチ

【目的】正常動物膝関節の関節軟骨や滑膜での GABA システム発現とその生理的機能について明らかにすると共に、関節リウマチモデル動物での GABA システムの関与について検討する。

【方法】正常およびリウマチモデル動物の関節での、GABA, GAD, GABA 受容体の発現を免疫組織化学的に検索した。

【結果】正常動物の関節軟骨および滑膜に GABA, GAD, GABA 受容体の発現を認めた。また、リウマチモデル動物では、関節腔内に多くの白血球を認め、これらが免疫組織化学的に GAD 強陽性であった。

【考察】関節軟骨や滑膜に GABA 受容体の発現を確認し、関節リウマチモデル動物では関節腔内に多量の GAD 陽性を示す白血球が認められたことから、関節リウマチで見られる滑膜増殖に GABA システムの関与が示唆された。

一般 5

発達障害児を持つ母親への支援についての考察

北山 淳 (四條畷学園大学) 長谷川士 (四條畷学園大学)

三谷保弘 (四條畷学園大学) 向井公一 (四條畷学園大学)

Key words : 発達障害, 作業療法, ストレス

【目的】運動障害と軽度発達障害を主体とする就学前の幼児の母親にアンケートを実施し、これらの異なる障害特性を持った2群を比較検討し、母親が感じる疲労感やストレスの違いを考察する。【対象】本研究についての説明、ならびに同意を得た、対人・知的障害児群16名(36.0±2.7歳)、運動障害児群13名(32.3±2.3歳)計29名である。【方法】遠城寺式乳幼児発達検査と自己記入式アンケートを母親に実施。運動障害児群は、脳性麻痺と診断された児童と精神運動発達遅滞と診断された児童(染色体異常と脳動脈奇形を含む)の2つに分類し、対人・知的障害児群は、自閉症と診断された児童と精神発達遅滞と診断された児童の2つに分類した。【結果】遠城寺発達検査の平均指数では、手の運動、基本的習慣、言語理解の項目で運動障害群の方が有意に低かったが($P < 0.01$)、他の項目では有意差は見られなかった。またアンケートでは母親の育児における孤立感を伺わせる項目が高ストレスであった。

一般 6

左半側空間無視患者における注意喚起による効果

—探索眼球運動検査を用いた検討—

吉田 健(国際医療福祉大学大学院) 後藤純信(国際医療福祉大学大学院)

夜久加代子(柳川リハビリテーション病院) 中山広宣(大阪保健医療大学)

Key words : 左半側空間無視, 注意喚起, 探索眼球運動

【目的】左半側空間無視(USN)患者の注意喚起による探索眼球運動から、無視症状の変化について検討した。【対象】行動性無視検査で131点以下の左USN患者3名で行った。

【方法】探索眼球運動は、アイマークレコーダーを装着し計測した。課題図は、108個の妨害図形(三角)と9個の目標図形(四角)を均等に配置した。探索課題は、被験者に「四角がいくつあるか数えてください」と指示し、15秒間提示した。回答した個数を課題回答数とした。次に、注意喚起課題では「左側をよく見てください」と課題図を提示している間、繰り返し注意を促した。その後、再確認課題として、探索課題と同様に行った。

【結果】全症例で、探索課題に比べ再確認課題で、左側注視点数が増加し、右側注視点数が減少したが、注視点総数は注意喚起前後でほとんど変化しなかった。課題回答数は、注意喚起後に増加した。【考察】繰り返し行った注意喚起により学習効果が認められ、右側へ偏位した注意が左側へ移動したと考えられた。

一般 7

脳室周囲白質軟化症小児の視覚情報処理機能と聴覚刺激の影響

中村泰子（久山療育園重症児者医療療育センター） 中山広宣（大阪保健医療大学）

高嶋幸男（柳川療育センター） 松永栄治（福岡県立粕屋新光園）

Key words : 聴覚刺激 視覚情報処理機能 脳室周囲白質軟化症

【目的】脳室周囲白質軟化症（periventricular leukomalacia, 以下PVL）児には視覚情報処理の障害が示唆されているが生理学的な検証はない。本研究は眼球運動を指標としてPVLの視覚情報処理機能を検証した。

【対象】PVL群12名（平均11.6歳）と小児群20名（平均6.5歳）、成人群21名（平均33.8歳）。本研究は国際医療福祉大学倫理委員会の承認と被検者の同意を得て実施した。

【方法】2m前方に顔・鈴・風景の写真を音無し条件と音あり条件で提示し、アイマークレコーダを用い眼球運動を記録した。統計は、二元配置分散分析を用いた。

【結果・考察】PVL群、小児群ともに聴覚刺激による眼球運動への影響が認められたが、成人群には認められず、小児の視覚情報処理機能の恒常性は成人と比べ発達段階と考えられた。PVL群には小児群との違いが認められ、頭頂-後頭白質に多発するとされる病巣が視覚認知に影響すると考えられており、眼球運動にも影響したと考えられた。

一般 8

訪問リハビリテーションにおける療法士の役割意識

—アンケート調査を通して—

林部博光（関西医療技術専門学校） 中俣恵美（関西医療技術専門学校）

片岡紳一郎（関西医療技術専門学校）

Key words : 訪問リハビリテーション, 自己決定, 社会参加

【目的】理学療法士・作業療法士が何を感じ何に重点を置いているのかを知るため

【対象】訪問リハビリテーションに携わる理学療法士と作業療法士合計26名

【方法】質問紙を用いたアンケート調査。項目は「利用者の心身機能の向上」「利用者の日常生活活動の向上」「利用者の社会参加」「利用者の福祉用具の利用, 環境整備」「個人の性格や特別な背景の理解すること」「利用者が現状を把握することについての説明」「利用者の自己決定」の7項目

【結果】心身機能と日常生活活動の維持・向上には重点が置かれているが、社会参加や自己決定という領域には踏み込めていないという結果などを得た。

【考察】支援者と利用者が共通理解を進める過程の困難さ

保健医療学学会第1回学術集会

集 会 長 中山広宣 (大阪保健医療大学 教授)
準備委員長 渡辺正仁 (大阪保健医療大学 教授)
副準備委員長 石倉 隆 (大阪保健医療大学 教授)
査読委員長 石倉 隆 (大阪保健医療大学 教授)

実行委員会

実行委員長 福井信佳 (大阪保健医療大学 准教授)
副実行委員長 野村卓生 (大阪保健医療大学 准教授)
総合司会 吉田 文 (大阪保健医療大学 准教授)
広報係 境 隆弘 (大阪保健医療大学 准教授)
会場係 藪中良彦 (大阪保健医療大学 准教授)
大友健治 (大阪保健医療大学 助手)
受付会計係 早坂友成 (大阪保健医療大学 講師)
清田直恵 (大阪保健医療大学 助教)
二田梨江 (大阪保健医療大学 助手)
PC管理係 山田隆人 (大阪保健医療大学 講師)
椎葉健太郎 (大阪保健医療大学 助手)
案内係 中平剛志 (大阪保健医療大学 助手)
島 雅人 (大阪保健医療大学 助手)
接待・懇親会係 佐藤睦美 (大阪保健医療大学 講師)
足立 一 (大阪保健医療大学 助教)